



長谷寺かわら版

# 百日紅

95号

2016 (平成28) 年  
8月1日

## 寿命と子ども

### ☆兄ちゃんの百回忌

数年前、とある檀家さんの法事で、百回忌の子どもの供養をしました。男の子ですから、戒名は「〇〇童子」。参列していた90代半ばの刀自とじの言葉に驚きました。

「あたしの兄ちゃんや」

ふつう百回忌の法事には、供養される人物を見知っている人は、参列してはいません。顔も、多くの人は名前さえ知らない人を供養するのが、百回忌の法事です。

そう思いこんでいましたから、百回忌の仏さんの妹さんが参列し、いまでも元氣という現実には驚いたわけです。

もちろんこのお兄さんが亡くなったのは、刀自が生

まれる前ですから、刀自は顔など知りません。それにしても、百回忌のお兄さんの法事の席に座って、菩提とじを弔うことができる。まさにそれが今という時代です。

昔はどうだったか。かつては、90歳まで生きるなんて稀有うのことだったし、もしそういうお年寄りがいたにしても、とても元氣ではいらなかったでしょう。

これから先はどうか。例えば、平成生まれの子どもたちが90歳になった時に、幼くして亡くしたお兄さんの供養ができるか。これもなかなかありえない話です。

たしかにこれからの時代は、90歳まで生きること自

体はそれほど特別なことではなくなるでしょう。例えばこの10年間、長谷寺が関わった葬式の記録を見ても、2割が90歳以上。5人にひとりという計算になります。ちなみに、冒頭で紹介した刀自は、今年めでたく百寿をお迎えです。

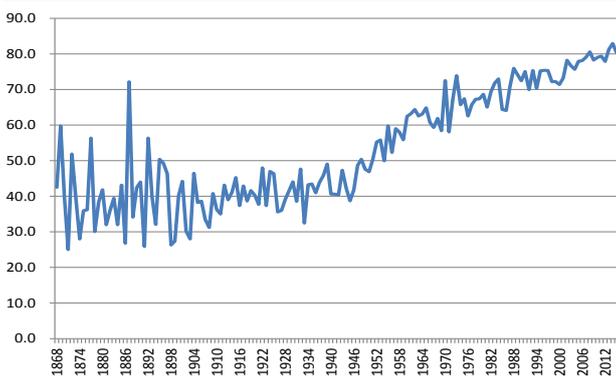
しかし一方で、いまは子どもが死ななくなりました。これからのお年寄りには、幼くして逝った兄弟姉妹は、きつといません。

いまはそういう特殊な時代というわけですが、そういう時代になった要因は、おもに次のふたつです。短期間のうちに寿命が一気に延びたことと、子どもが死ななくなったこと。

### ☆平均寿命

日本人の平均寿命の長さは、よく話題になります。そういえば、男性が80歳を超えたという報告があったのは、少し前のことでした。女性は86歳で、男女の平均では世界一なのだそうです。

平均寿命の変遷



そうなのかと思うだけで、実際に確かめてみたことはありませんでした。まあ普通、そんなことを確かめる人はいませんが。

幸い寺には、檀家さんの過去帳という、寿命を知るには格好のデータがあります。ひとつこれをもとにして、寿命の延びとやらの確かめてみることにしましょう。

左のグラフは、過去帳に記載された死亡年齢の平均値をグラフ化したものです。縦軸が年齢、横軸が西暦。1868年(明治元年)を起点にしたのは、

これより前の江戸時代の過去帳には、年齢の記載がほとんどないためです。また、1800年代のグラフが安定しないのは、データが少ないせいです。

19世紀までは、過去帳に年齢の記載があるものは稀で、確実に記載されるようになるのは、20世紀になってからです。このあたりから、データが増えるので、グラフは安定します。

さて、その安定したグラフによると、だいたい40歳くらいを上下しています。

グラフが右肩上がりになるのは、1946年、敗戦あたりからです。この頃までは、日本人の平均寿命は40歳くらいで、寿命の延びは戦後のことといえます。

敗戦は1945年ですから、約70年前です。わずか70年で、日本人はそれまでの2倍近く長生きになったわけです。これは驚異的なことです。

### ☆動物の寿命

ところで、戦前までの40歳という寿命は、生物としての

ヒトの寿命としては、極めて  
妥当なものらしいです。

ある生物学者によると、動

物が一生に刻む心拍数は、だ  
いたい決まっているのだそう  
です。どの動物も同じで、約  
15億回。生き物の寿命は、心  
拍数にすれば15億回というこ  
とになります。

ただ、心拍数が同じだから  
といって、寿命も同じという  
わけではありません。なぜな  
ら、心臓を打つ早さが動物に  
よって異なるためです。遅い  
動物の寿命は長く、逆に早い  
動物は短い。

概して、大型の動物ほど心  
臓は遅く打つので、長生きで  
す。ゾウは70年、ネズミはせ  
いぜい2〜3年。そしてヒト  
は40年。実際に40歳を過ぎる  
と、ヒトの老化が始まります。

動物としてのヒトの寿命は  
40年なんです。だとすれば、  
寿命からいっても、ヒトは動  
物から次第に遠ざかっている  
ことになります。

### ☆寿命の意味

では、心拍数15億回という、

動物の持っている時間＝寿命  
は、どんな意味をもっている  
のでしょうか。

実はそれは、子育てが終  
わって、次世代へバトンタッ  
チする、いわば生物としての  
役目を終えるまでの時間とい  
うことらしいです。

これを超えれば、身体は衰  
え、病気になるやすくなりま  
す。そうになると、弱肉強食の  
自然界では生き残れません。  
歳をとり、動きが鈍くなると、  
他の動物の餌食になりやす  
くなります。たとえ生き残った  
としても、得られる食料の量  
には限りがありますから、大  
切な次世代の取り分を減らさ  
ないために、自身の取り分は  
減り、ますます生きられなく  
なります。

親鳥が巣に餌を運ぶのは雛  
鳥のためで、その親鳥の年老  
いた親のためではないでしょ  
う。子育てどころか、産卵す  
ると死んでしまう生き物だっ  
ています。

そういう意味でも、親と子  
どもの両方の世話をしなけ

ればならないヒトは、動物の  
中でも、極めて特殊な存在に  
なったわけです。

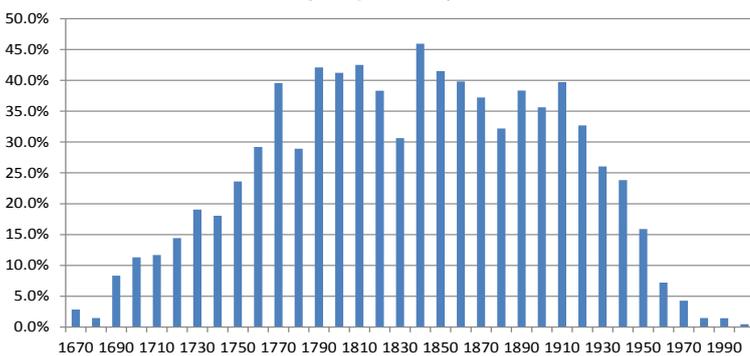
### ☆子どもたち

ところで、平均寿命が40歳  
ということは、誰もが40歳ま  
でしか生きられないという意  
味ではむろんありません。還  
暦を過ぎても生きる人だつて  
います。同じ意味で、平均寿  
命まで生きられなかった人も  
多くいました。

中でも、子どもの死の多さ  
が、全体としての平均寿命を  
引き下げていたことは想像に  
難くありません。このこと  
みましょう。

下のグラフは、うちの過去  
帳に記載されている霊数のう  
ちの子ども（戒名に「童子」  
「童女」とあるもの）の割合  
を、10年ごとに示したもので  
す。縦軸が割合。横軸が西暦。  
ちなみに過去帳のデータ  
は、江戸時代以降のものしか  
ありません。寺で過去帳が作  
られるようになったのは、江  
戸時代前期。キリシタン取締

子どもの死亡率



りのために、檀家制度が整え  
られてからのことです。  
たとえば、冒頭の話で紹介  
した刀自のお兄さんは、1911  
年（明治44年）に亡くなつてい  
ます。この1910年代の子どもの  
死亡率は4割。死者の半数近  
くが子どもです。

数値に多少のばらつきはあ  
るものの、18世紀後半あたり  
（1760年代）から、子どもの占  
める率は、ほぼ3〜4割を示  
しています。

これが昭和（元年が1926年）  
に入つて減りはじめ、戦後に  
激減し、いまはほぼ皆無。少  
なくともうちの寺では、もう  
10年以上も、子どもに引導を  
渡していません。

### ☆子どもの死

江戸時代は、死ぬ子どもが  
多かったということは漠然と  
は知ってはいても、こうやっ  
て数値にしてみれば、多いど  
ころではありません。死ぬの  
は、おとなではなく、むしろ  
子どもたちだったわけです。  
しかもわずか100年前まで。  
けれど、もつとずつと昔、

たとえば縄文時代あたりまで  
さかのぼると、子どもの死は  
それこそ普通のことでした。  
生まれても、ちゃんとおとな  
になれるのは、3人か4人に  
ひとりだったといわれています。  
子どもの死は、なんとお  
となの3倍以上です。

このグラフから安易に江戸  
時代の子どもの平均死亡率を  
割り出すべきではないでしょ  
うが、江戸初期の死亡率が中  
期や後期より低いはずはあ

りませんから、18世紀後半から19世紀にかけての数値である、3割から4割が下限と考えられるのではないかと思えます。細かい数値は示しません。5割を超えている年も少なからずあり、中には7割を超えた年もあります。幕末に近い嘉永2年(1849)のことです。

3割から4割を「下限」としたのは、子どもの場合は、死んでも葬式などしないことも少なくなかったように思うからです。なぜなら、江戸時代は捨子が少なくない時代でした。幕府や藩は捨子の禁止令を出し、一方で、拾われた捨子を育てるシステムも整えました。生きている子どもを捨てるのが珍しくない時代に、子どもの死を誰もか懇ろに葬ったとは考えにくいです。葬式をしなければ、寺の記録には残りません。ですから、グラフの示す初期の率の低さは、子どもの死亡率の低さではなく、葬式率の低さを示しているわけです。

ともあれ、少なくとも当地で子どもに戒名を付けて懇ろに葬ることが一般的になったのは、過去帳記載の子どもの割合が「下限」と考えた3割に達する、18世紀半ば以降のことといえるのではないかと思います。

「生老病死」という言葉があります。「生まれ、老い、病を得、死ぬ」という、人生における四つの苦しみを表わす仏教の言葉で、これにもう四つ加えたら、お馴染みの「四苦八苦」。

いかに時系列的に並んだこの言葉通り、「死」は「老」や「病」の次に来るものと思いがちですが、「生」から「老・病」を経ずに、直接「死」に至ることも、あつて当然なのだということ、普段は意識の外にあります。しかしそれも仕方のないことで、いまは事故や自殺でない限り、子どもはめつたに死ななくなりました。

### ★子どもの扱い

平安時代の記録によると、

たとえ天皇の家でも、子どもが死んだ場合、葬式は行わず、袋に納めて山野に捨てられていたようです。時代が下って、江戸時代になっても、子どもの死で家族が喪に服することはありませんでした。その死亡率の高さゆえに、子どもの死は、いまほど重大なこととは考えられていなかったといえます。

地方によつては、8歳になるまでは、当時の戸籍に当たる宗門改帳に記載さえされませんでした。ひとりの人間としてさえ認識されていなかったわけです。生まれても、大人になれる保証などなかったせいでしょう。ちゃんとおとなになれるだろうと判断して初めて、寺に届け出たことになりません。

ろに申いました。これが一般化するのはいま少し時代が下がってからのことですが、これには、江戸時代を通じて、継承されるべき家が成立してきたという時代背景があります。家の次代を担うべき子どもを、大切な存在と考える時代が、ようやくやって来たわけです。

### ★新しい位号

子どもへの関心の高まりはまた、新しい位号を生み出した。明治期になると、それまで童子・童女に限られていた子どもの戒名の位号に、嬰(えい)子(児)・嬰(えい)女(女)・嬰(えい)子(児)・嬰(えい)女(女)などが加わります。「嬰」と「孩」をどう使い分けているかは、判然とはしませんが、どちらも5歳か、せいぜい7歳までの子どもに付けられています。

明治になって教育制度が整い、学齢に達した子どもが「児童」と呼ばれるようになります。それよりも年少者・幼児には「童」という文字がそぐわないと感じるようになったせい

かも知れません。

「水子」という位号も見られるようになります。ちなみに水子は、かつては生まれて間もない子のことを意味しました。江戸時代には墮胎や間引きの子も水子と呼ばれたようですが、戒名を付けた葬式をしたりということはなかったようです。うちの過去帳で初めて「水子」の戒名が見れるのは、20世紀初頭のことです。

いまのように、水子が、「生まれなかつた命」を意味するようになったのは、水子の「崇り」なるものが喧伝され、水子を特殊な性格を持つ死者として扱う「水子供養」なるものが本格化する、1970年代あたりからのようです。ちなみに長谷寺の水子地蔵が作られたのは、1981年のことで、水子供養を求める時代と世間の風潮に、抗いきれなくなつたためらしいです。

### ★子どもの供養のいま

さて、江戸時代後半頃から、子どもの死に際しても、戒名

を付けて懇ろに葬り、位牌を作って供養をするようになりました。しかしその後、子どもは大切に供養されているかと考えると、どうもそうともいえないような気がします。

例えば、当地では秋に「大法会」と呼ばれる、名前の通りの大きな法要があり、ここで先祖の戒名の読みたてをして供養します。実はこの読みたての「先祖」から、子どもを省く家が珍しくありません。

これは、子どもは先祖とはいえないという考え方が根底にあるせいではないでしょうか。自分に繋がる、その人がいなければ自分が生まれていない存在だけを先祖と考えるなら、たしかに子どもは先祖とはいえなくなりません。

また最近、まだごくわずかですが、仏壇でまつられている位牌から、子どもの位牌だけを、永代供養で寺に預ける家も現われ始めました。これもやはり、子どもを先祖とは考えない立場でしょう。

親にとっては大切な子どもでも、子孫たちにとってみれば、必ずしもそういうわけではなさそうです。

けれど子どもは、ご先祖さんのうちの誰かの、孫や子であり、兄弟姉妹であり、おじおばでもあります。これまで通り、ご先祖さんのお仲間、いさせてあげて下さい。

人間の寿命と、子どもの死について考えてみました。寿命の驚異的な伸びで現出した社会は、寿ぐべき長寿社会ではなく、「高齢化社会」と、いささか否定的なニュアンスで呼ばれています。一方で出生率の低下も同時に進み、高齢化社会は今後一層、基盤の弱いものにならざるを得ません。未来に希望を繋げないわけです。むしろ、希望をもてない未来が、出生率の低下につながっているという側面もあります。

子どもの数が減り、家庭内での子どもの地位は上がりました。子どもを大切にす、望ましい時代が来たといえま

すが、その命を狙っている昨今の政治の動きが、とても気になります。女性たちに「子どもを産め」と迫るおじさんたちの相次ぐ発言も、底流にあるものは同じでしょう。

戦時中には「産めよ増やせよ」というスローガンがありました。産み増やさせる目的は、兵士にして戦場に行かせるためでした。

これから生まれる子どもたちに、どんな未来を渡せるのか。少なくとも、かつてのように、子どもたちを戦場に追い立てるような時代には、断じてしたくはありません。

場所だけに、新しいお堂を建てるということにはなりそうもありません。

広々としているせいか、駐車場として利用する方が、本堂前の空間よりもむしろ多く、お参りの人の動きが変わりました。

そういうことなら、ここから鐘樓の脇を通って、本堂に向かう通路を拵えました。これにともない、境内東側、観音堂の正面付近への車の進入は、ご遠慮願うことにしました。

車は、墓地に通じる西参道から駐車場にお入りください。本堂正面の参道から車でお入りの場合は、左折して駐

場場にお廻り下さい。歩きにくい方をお連れの場合は、お手数ですが、本堂前で降りてもらって、車は駐車場に移動して下さい。

並んだ木製の椅子は、車止め代わりに。



鐘樓前小徑

江戸時代以来の街道沿いの借地が寺に返還されて、早いもので、もう10年以上になります。土を盛り、石垣を築いて、ようやく境内の一部として馴染んできました。

この新しい境内地をどう利用すべきか、ずっと考え、様子を見てきましたが、場所が



並んだ木製の椅子は、車止め代わりに。

〒772-0004  
 鳴門市撫養町木津 1037-1  
 電話 088-686-2450  
 ファクス 088-686-2130  
 E-Mail cho\_kuma@mwb.biglobe.ne.jp  
 URL http://www.chokokuji.jp/

寺長 新行  
 編集 祐信